

公開講座「江戸東京の火災被害の歴史」

この講座では、江戸東京 400 年間の火災被害について、その変化や取られた対策の効果など規模の大きい火災（焼失面積 500 坪以上）から説明しております。

5 回目を数える今回は、銀座大火を取り上げました。この大火をきっかけとして不燃都市建設のため、明治政府が当時の西洋技術を取り入れた煉瓦街の建設を進めましたが、1923(大正 12)年の関東地震では煉瓦街が焼失してしまっています。不燃建築群として町が作られた銀座地区でなぜ火災を防ぐことができなかったのか。不完全な不燃化や住み手による改修で煉瓦造という不燃建築の周りに可燃物が多く存在したことが、銀座地区の焼失の要因の 1 つであると考えますが、その問題について考えてみました。

午後の街歩きでは、銀座地区が明治初期と比較して埋め立てにより河川や堀がほとんどなくなった現在でも、銀座通りの道路幅員が変化していないことなどを見ながら出火場所である和田倉門内から鎮火場所に近い勝鬨橋まで 5.3km を歩きました。

数寄屋橋では、石造の台座に「不意の地震に不断の用意」という標語が埋め込まれている関東大震災十周年記念碑や関東大震災後に復興小学校として RC 造で造られて泰明小学校を見ました。その後、豊岩稲荷神社を抜ける路地を歩き明治の町の名残を味わい、明暦の大火（振袖火事）後、海を埋め立て造られた本願寺を通り、勝鬨橋までを歩きました。

この銀座大火と煉瓦街については、東京都公文書館が編集している「都史紀要 3 銀座煉瓦街の建設」を参考にしてください。

